

美学者中井宗太郎の渡欧体験（1922～23）

——京都市立芸術大学芸術資料館所蔵中井宗太郎資料を中心に——

山 本 真紗子*

はじめに

近代のある時期、希望に燃えて、あるいは使命感に突き動かされて、多くの日本人が海外にわたった。期間、目的、滞在の形態などはさまざまなかたちであったが、とりわけ1920年ごろが戦前の日本人の洋行のピークといわれている¹⁾。本稿では京都の美学者中井宗太郎（1879～1966）の渡欧体験について、新出の資料をもとに滞在期間の様子を明らかにし、その経験がその後の彼の研究にどのような影響を与えたのかを論じていきたい。

中井宗太郎は京都市立絵画専門学校（現・京都市立芸術大学の前身のひとつ）の教員として、また大正期の若き画家たちの理論的・精神的な指導者として知られている²⁾。彼は京都に生まれ、東京帝国大学文学部哲学科でケーベルに学んだ。明治42（1909）年大学院卒業後、新設の京都市立絵画専門学校講師に着任し、昭和17（1942）年からは同校校長を務めた。戦後は立命館大学教授として文化史研究や中国研究に取り組んだ。これまで彼と国画創作協会の画家たちとのかわり³⁾には着目されてきたものの、彼自身の活動やその美学・美術史研究の意義については注目されてきたとは言えない。教え子でもある田中日佐夫はじめ、関係者により「人生派」や「真摯な観念論」者としての評価はあるものの⁴⁾、個別の論考を検討するような試みはほとんどない。近年、学術顧問としてかかわっていた高島屋百選会の趣意書における主導的役割について論じたものや⁵⁾、中国に西洋美術を紹介した画家・豊子愷への影響を論じた成果があるものの⁶⁾、例えば西洋美術受容や日本美術研究史上での位置づけは、いまだ十分に検討されているとはいえない。大正期からの彼の美術史研究の内容やその変遷、また戦後の立命館大学・日本史研究会での文化史研究での彼の役割の検討など未だ課題は多い。

そのようななか、筆者は幸運にも京都市立芸術大学芸術資料館所蔵の中井宗太郎とその妻あ

*やまもと まさこ 立命館大学文学部

い(愛/愛子)(1890~1978)の関係資料(以下、京市芸大中井資料)を調査をする機会に恵まれた。この資料群は、およそ段ボール箱ひと箱分の約260点からなる。短冊、新聞の切り抜きや読書ノート・原稿の下書き、そして中井宗太郎・あいの書簡から構成されている。このなかでも大きな割合を占めるのが書簡である。本論ではこの資料群の概略を紹介するとともに、そのなかから大正11年(1922)4月~大正12(1923)年4月の滞欧期間中の書簡に注目したい。中井宗太郎はあい夫人と、菊池契月・入江波光・吹田草牧らとともに約1年間ヨーロッパに滞在した。その間の見聞や生活の様子を書簡の内容をもとに概観する。それにより、大正期の彼の美術史研究を形作ったもののひとつとして、彼の渡欧体験の実態とその意義について明らかにしたい。

第1章 中井宗太郎・あい夫妻の渡欧について

(1) 京市芸大中井資料について

本資料は、中井宗太郎の死後、その蔵書が京都市立芸術大学図書館に寄贈された際、一緒に同大芸術資料館に寄贈されたものである。筆者が閲覧したときは段ボール箱1箱にまとめられていた。このなかに短冊3枚、新聞の切り抜きの束、原稿の束、『いただいた手紙から 宗太郎』と題した卷子1本、そして書簡類をいれた角形A4封筒9点がおさまられていた。本稿では、主にこのなかから中井宗太郎の書簡をとりあげる。

先に「封筒に分けていれられていた、と書いたが、これは段ボール箱に保管する際に整理者が暫定的に仕分けたものだそう。年月日が不明確なものも多いが、書簡類は渡欧時のものを除けば、岩波新書『浮世絵』発刊(昭和28・1953年)時の献本の礼状や感想、日本史研究会や立命館大学の関係者からの書簡が含まれる。書簡以外には、宗太郎の読書ノートやメモ類、草稿、自伝(未刊行)の下書きが含まれ、中井宗太郎の思想形成の背景や、研究のたどった道筋をかいまみられるものとなっている。

本資料には宗太郎夫人である中井あいの自筆資料が含まれていることでも貴重である。あいは大阪出身、女学校卒業後、幼稚園保母などを経て21歳で上京。津田英学塾入学、のち同志社女子専門学校英文科へ転校・卒業した。同志社女子専門学校在学中に宗太郎と出会い、大正3(1913)年結婚。大正5(1916)年から『みづゑ』に寄稿をはじめ。のち、宗太郎や黒田重太郎、竹内逸三らとともに「制作社」を結成、雑誌『制作』の編集・刊行に携わった⁷⁾。『制作』創刊号(大正7[1918]年12月)より翌年10月号までの8回、アンプロワーズ・ヴォーラル「セザンヌ」を宗太郎と共訳するなど、翻訳家として業績を積んでいく。海外文献の翻訳に取り組む一方、とくに戦後は婦人解放運動、平和運動、母親運動といった社会運動でも大きな役割を果たしたという。中井あいの学術的業績については、ドラクロアの日記の翻訳についての研究があるだけで⁸⁾、そのほかの著書や研究、社会運動での役割についてはほとんど明らか

にされていない。本資料には、あいの書簡や関連資料も含まれており、彼女の足跡をたどる資料としても貴重なものである。

（2）京都画壇の画家・美術史家たちの渡欧熱

第一次大戦の終結から第二次大戦開戦前のはざまの時代、多くの画家や学者が西洋の芸術をこの目で見ようと、こぞって欧州の地を踏んだ。中井夫妻の欧州滞在は、大正 11 年（1922）4 月～大正 12（1923）年 4 月のことである。彼ら二人だけで欧州に出発したのではなく同行者がいた。日本画家の菊池契月（1879～1955）⁹⁾、入江波光（1887～1948）¹⁰⁾、吹田草牧（1890～1983）¹¹⁾、春芳堂四代・伏原佳一郎（1900～1983）¹²⁾ である。菊池・入江は京都府からイギリス・フランス・イタリアへ派遣されていたという。

同時期に国画創作協会の画家たちも渡欧している¹³⁾。大正 7（1918）年に結成された同会では、大正 10 年（1921 年）4 月ごろに西洋美術研究のため欧州に会員 5 名を派遣すると決定。土田麦僊（1887～1936）・小野竹喬（1889～1979）・野長瀬晩花（1889～1964）・入江波光・村上華岳（1888～1939）・榊原紫峰（1887～1971）らは黒田重太郎（1887～1970）を先導役として渡欧することを計画した。そして同年 10 月 4 日、黒田、土田、小野、野長瀬の 4 名が賀茂丸にて神戸を出港。ただし、村上はぜんそくの発作のため、榊原は渡欧直前の妻の死により参加を見送る。入江は後日中井夫妻らと渡欧することになった。

この渡欧については、当人たちによる記録が比較的豊富であることに特色がある。以下、公刊されているもののみを取り上げる。土田らの渡航にあたっては大阪時事新報社が特派員扱いにして援助をしており、黒田は東京・大阪の『時事新報』に大正 11 年 1 月 1 日より「欧州芸術巡礼紀行」の連載を開始した（のち国画創作協会同人・大阪時事新報社編集『欧州芸術巡礼紀行』十字館、1923 年として刊行）。土田は渡欧中膨大な日記・書簡を書き残しており、当時の行動や思考を詳しく追うことができる¹⁴⁾。

中井と同行した吹田には自筆の「渡欧日記」6 冊と 81 通の書簡が残されており¹⁵⁾、日記は『渡欧日記』として『視る』（京都国立近代美術館ニュース）に神戸出港以前を除き全文翻刻され、書簡も田中日佐夫により翻刻がおこなわれている。吹田は中井らが帰国後も一人残り美術館巡りと作品制作の旅をつづけ、大正 12（1923）年関東大震災の翌日の 9 月 2 日に帰国した。なお、大正 13（1924）年滞欧作品展を開催し、第四回国展に《郊外秋景》を出品、国展会友に推挙されている。菊池契月の書簡や日記類は所在が確認されていないが、道田美貴が吹田の書簡・日記から契月の動向の再現を試みている¹⁶⁾。

他にも、土田らが出発する直前、日本画家橋本関雪（1883～1945）¹⁷⁾ が渡欧し、フランス、ドイツ、イタリアなどをめぐり 12 月に帰国。深田康算（1878～1928）¹⁸⁾ が留学中など、京都の画家・学者たちも多く渡欧していた。

第 2 章 中井宗太郎の欧州での足跡

(1) 中井宗太郎の滞欧書簡

京市芸大中井資料には、夫妻滞欧中の書簡類 37 点が含まれている（表 1・以下引用の資料番号は表に拠る。本文末に掲載）。いずれも滞在地の宗太郎・あいから京都市内の中井の家族宛に送られたものである。帰国後に家族から夫妻に返却されたものであろうか。非常に親密な内容であり、宗太郎の素直な思いが伝わっている。家族から宗太郎・あいにあてた書簡や、同僚や友人とのやりとりは残念ながら含まれていない。主に旅の後半の大正 11 年秋以降、帰国直前のものが中心である。また、宗太郎は日記をつけていると書簡内で言及しているが京市芸大中井資料内には発見することがなかった。

宛先となっているのは、宗太郎の「母上」「姉上」と「(中井) 辰三」である。姉・絹子(1874~1941)は号を梅園(椋園)といい、画家であった。鈴木松年門で上村松園の姉妹弟子にあたる。父が商売に失敗し家業が傾く中で、彼女がその筆で宗太郎の学業を経済的に支えたという¹⁹⁾。宗太郎は書簡内でまれに彼女を「先生」と呼んでいるが、平安女学院の教師を務めたことに由来すると思われる。

「辰三」は書簡内では「辰三君」と呼ばれる。宗太郎の弟²⁰⁾と思われる。渡欧直前に大病をしたかもしくは体が弱かったようで、宗太郎は辰三の体調に気を付けるよう何度も言及している²¹⁾。辰三は当時歌澤に熱中していたらしく、歌澤の名取に関する話題などが書簡内にみられる²²⁾。

京市芸大中井資料と吹田草牧の日記から推定される中井夫妻ら一行の欧州滞中の行動の概要は次のようなものである。

(2) 現地での交流

大正 11~12 年のこの時期には多数の日本人が渡欧しており、パリやロンドンなどの大都市

(表 2) 中井夫妻と同行者の主な旅程

大正 11 (1922) 年	4 月 18 日	中井夫妻・入江・吹田・菊池・伏原 神戸出発
	5 月 31 日	中井夫妻・入江・吹田・菊池・伏原 パリ到着
	8 月 6 日~8 月 16 日	中井夫妻・入江・吹田・菊池・伏原 イギリス旅行
	8 月 19 日~9 月 2 日	中井夫妻・入江・吹田・伏原 ドイツ旅行
	10 月 1 日~11 月 19 日	中井夫妻・入江・吹田・菊池 イタリア旅行 11 月 19 日伏原マルセイユを出発し 12 月末帰国、入江・吹田はイタリアに残る (~1 月 28 日)
大正 12 (1923) 年	2 月 8 日~2 月 15 日	中井夫妻 スペイン旅行
	2 月 22 日	中井夫妻・入江・菊池 パリ出発
	4 月 4 日	中井夫妻・入江・菊池 神戸着
	7 月 29 日	吹田がパリ出発・9 月 2 日横浜着

では日本人のネットワークも形成されていた²³⁾。例えば土田や吹田の書簡・日記を見ると、なじみのレストランや日本人倶楽部で滞在中の日本人と交流し、連れだって郊外に出掛けるなど、パリで人脈を構築していることがわかる。日本で知人・友人と会うこともあれば、滞在地での出会いが帰国後続くこともあっただろう。しかし、中井夫妻は、深田康算²⁴⁾や「近藤氏」（烏丸五条のリボン商）、「寺尾氏夫妻」、ドイツの「織田君」らごく一部を除いて、どうやらそうしたネットワークとは少々距離を置いていたようである²⁵⁾。そのことを示す行動の一つに、中井夫妻は米飯を中心とした自炊をしていたということがあげられる²⁶⁾。宗太郎の食の好みの問題もあったようだが²⁷⁾、外食は値段が高いということもあってほとんどしなかったらしい。日本人倶楽部にも正月にお雑煮を食べに行くときなど、特別なとき以外はあまり訪れなかった。当時、特定のカフェやレストランが日本人滞在者のたまり場となっていたため、そうした場所に出入りが少ないと、必然的にほかの日本人との行き来も少なくなることになる。

同行の6人は晩餐後誰かの部屋に集まって数時間話し込むことはたびたびあった。吹田は入江とともに土田や他の画家たちと交流していたようだが²⁸⁾、菊池は一人で黙々と制作に励んでいた²⁹⁾。こうした態度は、わずらわしい人間関係を避けて自分の勉強に打ち込むといった意味合いもあったようである³⁰⁾（実際、土田や吹田の日記・書簡からは、日本人滞在者間で不仲やグループ間の対立のようなものがあつたことがよくわかる）。他の滞在者とさかんに行き来していた土田などからすると、彼らは不思議なグループに見えたらしい。

とはいえ、宗太郎はパリの生活を非常に気に入っていた。

「巴里ハ実ニヨイ所デス 人間ノ偉大ト幸福トヲ泌々感ジマス。実ニ巴里ヘ来テ幸福ダト思ヒマス。」「言葉ガ十分通ジナイガ併シ実ニ居心地ノヨイ所デス 落付イテマス」（【資料番号4】6月13日パリ、宗太郎書簡）

「併シ私達ハ決シテ遊ブ暇ガアリマセヌ。巴里ニデモ居ルト人ハ遊ビニ行ツテルモノノヤウニ思ヒマスガ事実ハ中々ソナモノデハアリマセヌ コ、デハ勉強^(ママ)セナケレバキラレマセヌ 眞面目ニ考エナケレバキラレヌ様ニナリマス。ソレデ眞ニ人間ノ悦ビヲ感ジマス 巴里ヘ来タ事ハ実ニ幸福デス。私ハ三四年モ居タイト思ヒマス。併シ今度ハ予定通りニ帰リマスガ是非今一度来ルト云フ覚悟デス。」（【資料番号5】6月29日、パリ、宗太郎書簡）

「二年ホド居テ静ニ勉強シタイノデスガ、実ニ巴里ハ気ニ入りマシタ。金モ余リカ、リマセヌ。又手紙ヲ度々呉レルト結構デス。」（【資料番号6】7月10日パリ、宗太郎書簡）

できることなら数年滞在したい、あるいはまたすぐに欧州に来たい、と何度も書簡内で言及

している。帰国後渡航の計画もしていた³¹⁾ようだが実現しなかった。

実際の中井夫妻のパリでの一日は主に下記のようなものであった。

「朝起キルトパンヲ買ヒニ行キマス。パンハ長ウテ丁度剣ノ様デス。ソレヲ小脇ニハサン
 デ帰ツテ来ルノデス。巴里人ハ立派ナ人デモ皆左様ニシマス。ソレガ実ニウマイパンデソ
 ノ味ハ忘レラレナイ甘サデス。値ハ僅ニ十銭デス。時ニハ牛乳ヲ買ツテ来テシ(ママ・ショコラーカ)コロラー事
 モアリマスガ パンヲ喰ベテ後カラお茶ヅケヲ喰ベマス。ソレカラ愛子ガ学校ヘ行キマ
 スト私ハ家デ本ヲ讀ンダリ書イタリシマス。晝ハ簡単ナ食事ヲ取りテ食後ハ博物館ヘ行ク
 カ或ハ仕事ノ都合デ家ニ居ル時モアリマス。コレハルクサンプルノ公園カラ一丁ホドノ所
 デスカラヨク出カケマス。(ママ・以下同)小 供ガ澤山遊ンデキマスシ池ニハ小供ガ船ヲ浮ベテマス
 私達ハ樹影デ本ヲ讀ンダリ小供ヲ見タリシテマス。夜ハ洋食ヲタベニ行クカ家デ何か御
(ママ)置 走ヲタイタリシマス、併シ多クハ米ヲタイテ喰ツテマス。夜ハ勉強シマスガ大抵
 二時間話シヲシマス。菊池サンガ丁度お隣ノ室デスカラドチラカニ集ツテ話シヲシマス
 今夜モ二時間ホド話シマシタ。併シ夜ガ大分ニ長クナツテ来マシタ。前ニ八十時ニ未ダ
 明ルカッタノガ此節ハ七時半位ニ暮シマス。」(【資料番号 12】9月25日、宗太郎書簡)

宗太郎はルーブルへ行き作品を言葉でスケッチするのを日課としていた。あいはフランス語の個人授業や語学学校に通ったのち、ソルボンヌ大学の講義に参加。会話もかなり上達したという³²⁾。そのほか、新しい作品を見に画廊などにも足を運び、時には夫婦で観劇に出掛ける³³⁾など、パリの芸術を楽しんだ。

もうひとつの目的であり、楽しみであったのが本の購入であった。外食をしないのも、ひとつは費用を節約し、本代にあてるためであった³⁴⁾。旅行先でも書物を買ってこんでいる。土田らは博物館や展覧会のほかにもしょっちゅう画商を訪ね、新旧問わず多くの作品を購入していた。竹内栖鳳からも購入を依頼されていたようで、土田は先に帰国する中井にその一部を託している。しかし、中井夫妻は写真は多数購入したという記述はあるものの、作品そのものの収集には言及がなく、本に比べれば関心がなかったようである。書名目録などが残されていないため、何を買ったか明らかでないのが残念であるが、数年分の研究の材料ができたと姉たちに書き送っている。これらを携え、中井夫妻は日本への帰国の途につくことになる。

「繪ヲ見音楽ヲキクコトダケハ日本デハ能ワヌ。コレニ外遊ノ値打ガアル。」(【資料番号 13】[9月]26日、パリ、宗太郎書簡)という毎日。これが、宗太郎がパリこそ「人間ノ偉大ナ幸福」とした理由であったのだろう。

（2）ロンドン，ドイツ，イタリア，スペインへの旅行

中井夫妻はパリを拠点にしながら周辺の都市を周遊している。二人だけの旅行というわけではなく、ほとんどは一緒に渡欧した仲間たちとの旅行であった。

《1》ロンドン旅行（8月6日～8月16日）

ロンドン滞在中の書簡は、8月12日付のロンドン塔の写真はがき一通しか現存していない。そこにはメトロや「二階つきの乗合自動車」に乗り、ロンドン塔や大英博物館、ナショナルギャラリー、サウスケンジントンを巡ったとある（【資料番号8】8月12日、ロンドン、あい、はがき）。サウスケンジントンでは、偶然大類伸（1884～1975）³⁵⁾ と出会ったという³⁶⁾。あいは学生時代大類のルネッサンスの講義を受けており、彼らはローマでも再会した（後述）。

大英博物館の作品で評価しているのは、ギリシャ彫刻であったようだ。パルテノン彫刻に感心する一方、絵画に関しては「繪ノ方ハ駄目デス繪ハ何ト言ツテモ巴里デス」³⁷⁾ と、にべもなかった。

《2》ドイツ旅行（8月19日～9月2日）

ドイツ旅行中の書簡には現存しているものがない。吹田の書簡・日記から日程を再現すると、中井夫妻・入江・吹田・伏原は8月26日からベルギーのリエージュ、ルクセンブルクを經由しベルリンに到着。「織田君」がガイドをしてくれたとある。一行は8月30日からドレスデンへ入るが、入江・吹田・伏原は中井夫妻の1日後にドレスデンを出発、その後も夫妻とは別行動だった（3名はライブチヒをまわって再度ベルリンに入ってからパリへ戻っている）。中井夫妻は、「KölnヘヨツテGotikデ有名ナ寺院ヲ見タ」あと、ベルギーのリエージュへ暫く下車し、2日夜11時半ごろパリに到着したという（【資料番号10】9月4日、パリ、宗太郎書簡）。

ドイツ旅行を振り返って宗太郎は「独乙デ見タモノハーツツ私達ニ何物カラ教ヘテ呉レタ。ソレハ一寸手紙デハ書キ切レナイ。日記ニ書イテアルカラ、帰ツテカラ話ス。」（同前）としている一方、「独乙ノ博物館ハサスガGotikノモノダケハヨイモノガアルガ他ニハ別ニ見ルモノガナイ タゞ利益ガアツタ 実際ノ独乙ヲ見、本ヲ買ツタダケデモ、」（同前）と書いており、作品を見ることより、実際にドイツの地を踏んだことが一つの成果と考えていたようである。

《3》イタリア旅行（10月1日～11月19日）

4回の旅行のうち最も書簡が残存しているのはイタリア旅行である。写真はがきや書簡に「伊太利第〇信」と番号が振られており、第十信まで出されていることがわかる。このうち第二信・第五信を除き現存している。

イタリア旅行には中井夫妻・入江・吹田・菊池・伏原の6名で出発した。途中入江・吹田が

別行動をとり、伏原はイタリア旅行後帰国の途に着いている。残された書簡のほとんどが写真はがきであるため、個々の作品の感想や考察については残念ながらあまり触れられていない。しかし、イタリア旅行をすることにより宗太郎は、西洋美術の古代から近代までを系統的に見たという実感を得たようである³⁸⁾。

一方、あいはいというと、イタリア旅行ですっかり中世に魅せられてしまったらしい。もともと彼女は「欧羅巴の地を踏むまで中世に關して私は全くの無智」³⁹⁾であり、その旅の目的は「欧羅巴近代に注目して、できるだけ其を體得したい」というものであった。しかし、大類とローマで再会し、その「歴史的に研究された實地見学の御指針」にそって古寺をめぐるうちに大きな衝撃を受けたようである。この旅の衝撃とその後の研究の成果は、後年『新しき中世の美』としてまとめられた。

《4》スペイン旅行（2月8日～2月25日）

滞欧中の最後の旅行先がスペインである。これには中井夫妻のみで出発したようで、吹田の日記・書簡内にもほとんど記述がない。旅行後パリから送った書簡によると、マドリードとトレドをまわったようである。

「西班牙ハ実ニヨカツタ。ナニシロプラドノ美術館ガ世界有数ノモノデヨイモノガアル上
西班牙繪ハコ、デナケレバ見ラレナイノダカラ。

ソノ上丁度謝肉祭トテ来テキルノデ古イ風俗ガ見ラレタ。 三日間コ、ノ美術館ヲ見テ
トレドヘ行ツタ。コレハ又古イ都デ幾千年ノ昔モール人ガ造ツタモノガ所々ニ残ツテキテ
趣ガアル上ニターヨーノ河ニメグラシタ山ニ立ツテキテ景色ガ実ニヨイ。 ソコニグレコ
ノ繪ガ所々ニアルト云フノダカラ実ニヨロシカツタ。

西班牙ヘ行ツタ事ハ実ニヨイ事デアツタシ快ヨイ印象ヲ得テ帰ツタ。ソノ上幸ナ事ニハ天
氣ガ非常ニヨク日本ノ春四月ノ感ジデアツタ。」（【資料番号 33】2月18日、パリ、宗太郎書
簡）

以上、簡単に中井夫妻のヨーロッパでの足跡を見てきた。精力的に各所をまわっている一方、各旅行の日程は短く、かなり駆け足での滞在であったことがわかる。そのなかでも古代や近代の作品を中心に鑑賞していたようである。

第3章 渡欧で目にしたもの

(1) 古代との出会い

前章では、書簡を中心に断片的な旅の記録から宗太郎の足取りを明らかにしたが、宗太郎は美術館や遺跡をめぐるなかで、どのような思いを持つにいたったのだろうか。滞欧の目的は、やはり実際の作品や建造物を目にすることにあった。おそらくそれは、渡欧前に構想していた彼なりの“西洋美術史”について、確信を得るための旅であったと思われる。

宗太郎は渡欧直前に『近代藝術概論』（二松堂書店・大正11[1922]年10月10日発行）を上梓した。この本の緒言（大正11年4月23日付）は「この稿を携へて、私は今渡欧の途に着きます。その感激と批判は、他日増補の機を待ちたいと存じます。」という言葉で締めくくられている。『近代藝術概論』にみられる彼の思想については、西楨偉により豊子愷の翻訳書との比較のなかで詳細に論じられている⁴⁰⁾。西楨によれば、人格を芸術的創作の基準として見ていること、西洋画家のなかにも東洋的な価値観、たとえば文人画家的な態度や表現主義精神を見出していることなどが特色だという。そうした東西の芸術の差異よりも共通項を見出すという宗太郎の視点は、実際に西洋美術を見たうえで、さらに深められることになる。

「何ト云フテモ美術ハ巴里ダ」（【資料番号11】9月12日、パリ、宗太郎書簡）というように、滞欧の拠点としていたパリでは、ルーブル美術館はもちろん⁴¹⁾、トロカデロ博物館（【資料番号5】[6月]29日、パリ、宗太郎書簡）、セーブル博物館（【資料番号6】7月10日、パリ、宗太郎書簡⁴²⁾）などにも足を運んだ。『近代藝術概論』でとりあげた画家たちの作品はもちろんのこと、もう一つ関心をもって眺めていたのが古代の美術である。

前述の通りイギリス旅行では、大英博物館でギリシャ彫刻、とくにパルテノンの彫刻（エルギン・マーブル）を見て感心し、今後研究対象とすることを決めた⁴³⁾。その成果が欧州で執筆した⁴⁴⁾『歐洲藝術精華第壹編『氷河時代と埃及藝術』（大正12・1923年）と第貳編『希臘藝術』（大正14・1925年）である⁴⁵⁾。『氷河時代と埃及藝術』の巻頭には「この稿を前後十篇に分かつて」とあり、刊行当初は10巻程度のシリーズものとして計画されていたことがうかがえる。『氷河時代と埃及藝術』『希臘藝術』に収録された図版は、大英博物館やルーブルの所蔵品のほか、同時期にパリに滞在していた菊池・入江・石崎光瑤（1884～1947）⁴⁶⁾らの所蔵品も掲載されている。参考文献にはヘルベルト・キューン（Herbert Kühn・1895～1980）⁴⁷⁾やエリー・フォール（Élie Faure・1873～1937）⁴⁸⁾が挙げられている。両者の著書は宗太郎渡欧直前の時期に出版されており、最新の研究成果を取り込んでいることがわかる。

とくにフォールについては、本文内でも言及しており影響が大きかったと推測できる。フォールは一般的な美術史研究とは一線を画し、時代や歴史の隔たった美術作品の中に共通の表現を見出した。「形態」の本質にせまり、風土的条件が作品形態に及ぼす影響について言及

するといった独特の視点を持っている。そして美術の世界のみならず、自然や人間、生命までもその考察の射程に入れた（彼の本職は臨床医・生物学者であった）⁴⁹⁾。こうした、洋の東西や時代を超えた作品のなかに共通する芸術の本質を見出し、人間の本質にせまろうとするフォールの理論は、画家の人格や、作品が生み出されてきた社会や経済の構造を問題とする宗太郎にとっては取入れやすいものであったと思われる。

『氷河時代と埃及藝術』の緒言には下記のように記されている。

「私はさきに欧州藝術巡禮を試み、彼地の神品に接した時、久しく別離した祖父母に巡り會ったやうな懐かしさと感激とを覚えた。それはたとひ時を経て場所を異にしてゐるに拘わらず決して見ず知らずの他人ではなく、既にその血は吾々の中にも流れてをり、またこれからさきもその血や肉の中に、自分たちも生きて行くと云う、全く思ひもかけない血族をしみへと感じたのであつた。かくて世界至高の文化に参する悦びと、彼地の藝術もまた私達の中に生きることを知った感激とは、忘れやうとも忘れ得ない感銘であつた。」

このように、中井は古代芸術に対して特別の感激と親しみを表明している。西洋美術を日本美術と全く別のものや対立するものとしてとらえるのではない。ふたつには同根のものがあリ、またそれはすでに日本美術のうちに存在し、今後もそれは続いていくという想い。それは彼が日本美術の今後を考えていくときの基盤となる。

(2) 同時代絵画への期待と落胆

宗太郎が、古代・近代の絵画と並んで期待していたのが新作絵画である。「マドレーヌ」【資料番号 6】7月10日、パリ、宗太郎書簡「ベルネーム」(ベルネーム＝ジューム画廊)【資料番号 27】12月13日、パリ、宗太郎書簡)など、画廊や展覧会などにも積極的に出かけていたようだ。

「私ハ毎日大抵ルーブルへ研究ニ行キマス コヽニハ古代カラノ彫刻モアリ繪画モアリソノ数幾万トモ知レヌノデ未ダ少シモ見ナイ所ガアル位デス 一ヶ月以上見マシタガ、今日ハルーブルガ休ミナノデ、マドレーヌヘ新シイ人ノ繪ヲ見ニ行キマシタ。セザンヌ・ゴッゲ、ゴッガンハ古イ部デ大抵ハ今生キテイル、若イ人ノモノデス。ブラマンク、ドラン、ロート、ビシエールナドハ日本デ名ヲ知ラナカツタガ実ニ立派ナ繪ヲ書^(ママ)キマス、コチラヘ来テ實際ノ作品ヲ見ルト想像以上ニヨロシイ。若イ人モ中々ヨロシイ。私ハ毎日コノ新シイ人々ニツイテノ論文ヲ書イテマス。」【資料番号 6】7月10日、パリ、宗太郎書簡)

近代の絵画については、渡欧前に評価していた画家たちの作品を実見し喜んでいるが、同時

代絵画に対しては期待と落胆の両方を体験することになった。

「巴里ハ実ニ藝術ノ都デス。昨日モ ボエツシーヘ行キマシタガ新シイ絵ノ展覧会ガ三ツモ四ツモアリマシタ。餘リ感心シタモノモナカツタガ、ソレデモ日本ヨリハ遙カニヨイモノデス。中ハ古イ立派ナ作品ヲ見ルコトガ^(ママ)能キマシタ。

秋ノサロンモ見マシタ。コレハソノ数三千点デーツーツ見ルコトガ能キナカツタノデヨイト思ツタモノヲヨッテ見マシタ。併シ余リ感心シタモノモアリマセヌ コチラノ人モ迷ツテキル^(判断不能) ■ 見^(判断不能) ■ 様々ニサグリナガラヤツテマス。併シ日本ヨリハ真面目デス。コチラヘ来テ感心スルノハ何人モ他人模倣ヲセズニ自分ノ信ジルモノヲグングント徹底シテ^(ママ)行クコトデス。コレハ是非日本デモソウアリタイト思ヒマス。」（【資料番号 26】12月3日、パリ、宗太郎書簡）

ここでは画家たちが日本人より「真面目」で、他人の模倣をしないこと・自分の信じたことを徹底すること、という姿勢を評価し、日本人も見習うべきとしている。しかし必ずしも宗太郎の期待に応えるようなものばかりではなかったようである。

「近頃ノ若イ人ノ繪ヲ見ルト日本デ想像シタホド突飛デハナイ。巴里人ハ案外^(ママ)温健ダ。マダ、印象派ノ繪ヲカイテキル奴ガアル、併シ多数ハセザンヌ張ガ多イ。中々ニハ自分ノ道ヲ行ク中々ニエライ奴ガキル。独乙ハ佛蘭西ヲ極端ニシ突飛ニシタ^(ママ)ケデ実ニツマラス」（【資料番号 27】12月13日パリ、宗太郎書簡）

フランスの画家たちの作品にも迷いや停滞があり、今後の新しい芸術の方向性はまだ表れていない。日本美術だけでなく、西洋美術もまた苦しんでおり、絶対的な存在ではないということを知って、西洋美術への評価の相対化が宗太郎の中に実感されたのではないか。

また宗太郎が、とりわけ日本画の将来について思いを巡らせるきっかけになった出来事が、もう一つ考えられる。宗太郎が滞欧してすぐのところにパリで開催されていた日本美術展覧会（Exposition d'Art Japonais）である。フランス国民美術協会サロン展（Le Salon de La Société nationale des beaux-arts）が主催した展覧会で、1922年4月20日～6月30日の会期で日本画、油絵、彫刻、装飾美術、古美術の部があり、竹内栖鳳や石井柏亭、岸田劉生らの作品が出品されている。しかし、これを見た宗太郎は、落胆を隠していない。

「三日前ニ日本画ノ展覧会ヲ見ニ行キマシタ。 コチラデ日本画ヲ見ルト馬鹿ガ書イタモノトシ^(抹消後訂正) ● カ思ハレマセヌ。実ニ困ツタモノデス。 巴里ノ絵ハ古イモノデモ新シイモ

ノエモ実ニ立派デス。」(【資料番号 5】(6月) 29日, パリ, 宗太郎書簡)

なお、この展覧会については吹田も土田も厳しい評価を下しており⁵⁰⁾、宗太郎らはいずれも日本美術の現状について危機感を抱くことになる。

展覧会観覧後の感想をもとに宗太郎が執筆したのが、「日本畫の行くべき道」(『大毎美術』19号, 1924年)である。宗太郎は会場に入った「瞬間に私は或る種の強い衝撃を受けたのである。而してそれは私のこれまでの恐怖が全く裏書されたことなのであった」。「全く日本畫は臺無し」の体で「殆ど藝術といふ名を冠する資格は一つもあり得ない程にしか観られなかった」「日本人の顔を晒すことが急に恥ずかしくなつて」宿舎に逃げ帰ったと激しい口調で述べる。この稿のなかで彼は、日本画が今後とりうるべき方向性は二つあるとする。つまり、伝統を踏まえつつ新しい芸術を生み出すか、過去から離れ全く新しい芸術を打ち立てるか、という正反対の二つの道である。しかし、この二つの道を討究する以前に必ず考えねばならぬ問題があるという。それは「絶対(的)精神」, 「時代精神」「個人の精神」である。「絶対(的)精神」とは「時代、國土、人種を離れた謂はゞ時空を超越したるイデア」であつて、西洋・東洋、時代に拘わらず「この魂を基礎として生み出された作品でなければ價値の多寡を論ずる資格がない」ようなものである。そのうえで、時代について理解し芸術に反映させていく必要がある。絶対精神に基礎を置き時代精神に目ざめることが、やがて「個人の精神を活かし、個性を尊重し、創造性を生命としたる藝術の萌芽を甦る」ものでなければならないという。

として、宗太郎は画家である姉にはもっと忌憚のない意見を書き送っている。

「巴里人ハ実ニ馬鹿ナホド呑気人間デス。日本人ハアセリスギマスソレデセ、コマシウテキケナイ。悪ガシコイ奴バカリデス。コレガイヤデス。日本人ハ人間ニシテヨクヤラナケレバイケナイ。併シ古代ノ日本藝術ハ中々ニ偉大デス。私ハ帰ツテコレヲ見ルコトヲ楽ミニシテマス。」(【資料番号 26】12月3日, パリ, 宗太郎書簡)

「老大家ナゾハソレハ名声ノミデ実ニツマラヌモノデス。時代ハ絶ヘズ進展シテマス。我々ハ真面目ニ勉強スル事デス。藝術ニハ新舊ハナイ。近代ヨリモ寧ロ古代ニ感心シマシタ。近代ノモノハ混リケガ多クテイケナイ。古代ノモノハ純粹デ単純デス。人間ハ純粹デ単純ニラナケレバナラナイト思ヒマス。生一本ノ正直ト単純ニ帰ル事デス。

日本ノ現代画家ハウマイトカ上手トカ言ツテサテモソレハ実ニ笑ウ可キモノデス。到
(抹消後訂正)
 ● 底駄目デス。根本カラ改造シテカ、ラナケレバ日本藝術ハ生レマセヌ。私ハ大分ニヨイ寫眞ヤ本ヲ持ツテ帰リマス。帰ツタラソレヲ見セテ考ヲ云ヒマス。十分ニヨク見テカラ考ヘテ下サイ。コレカラ行クべき道ハ澤山ニアリマス 我等ノ勉強ハコレカラデス。

日本デヤカマシク言ハレテキル ミケルアンゼロヤラフアエルソノ他大抵ノ人達ハエライニハエライガ、ソレヨリモモット立派ナ藝術ガ古代ノ無名作家ニアリマス。我ハトクニコレヲ研究シテマス。

ト言ツテモ寫眞デモ見テモラハナケレバ分カリマセヌカラ帰ツテカラノ事デス。トニ角日本ノ現代画ナドニハ眼モクレナイ事デス。（私ノコ、ニ書イタ事実ハ人ニ言ツテ下サルナ日本人ハスグ誤解シマスカラ。）」（【資料番号 31】1月22日、パリ、宗太郎書簡）

このように、人間として「真面目」に勉強し純粋で単純であること、それこそが芸術家の生き方として必要であり、日本人は人として良くならなければならないという主張は、田中や西楨など先行研究が指摘する宗太郎の基本姿勢、つまり画家の人格を高めることが良い作品を生むというものである。しかし、この主張はパリでの経験を経て、より実感をこめたものになったのではないだろうか。

おわりに

本稿では中井宗太郎の渡欧中の足取りと書簡、その間に著した論考について概要を確認してきた。彼の西洋美術への態度において、渡欧前後に劇的な変化があったという印象は受けない。むしろ、渡欧前に描いた西洋美術研究の構想を作品を見て確認し、より確固たるものとするというものではなかったかと考える。

彼は芸術の創造において画家の人格を非常に重要視しているものの、滞欧中の書簡を見る限りでは、実際に現地の画家や研究者と交わろうとした形跡がない。現地で交際したのも、深田や大類のような日本人研究者たちであった。例えば土田はピカソらに会いたいと頼んだことを8月3日の書簡で言及している。中井夫妻の場合は、あい夫人がフランス語に堪能であったし、望みさえすれば交流することはできたはずだ。しかし、前述したように、彼は美術館や展覧会での実見と本の購入という方法で研究を進めていた。結局、西洋の画家の生態や人格というものを直に観察するということはなかった。彼にとっての西洋の画家、あるいはその人生は、作品と本のなかにのみ生きていたのである。

帰国後の宗太郎はどちらかといえば日本美術研究が主たるテーマになる。戦後になると中国への関心をつのらせ、さらに東洋美術へ傾倒したともいえる。ただ、完全に西洋美術から離れたかといわれればそうではない。例えば「桃山時代はわが國に於けるルネッサンス」（『永徳と山楽』中央美術社、1927年、p.5）という主張がある。狩野永徳が到達した自然観照や、この時代の自然の描かれ方、人間の描かれ方というものが「ルネッサンス」としてとらえられるというものである（このような宗太郎の主張の位置づけについては、先行する福井利吉郎『安土桃山時史

論』[1915年]などとも考え合わす必要があるし、中井自身についても史的唯物論への関心の高まりなど、渡欧体験以外の要素や関心事項を考慮しなければならないため今後の課題である)。また、『絵画論』(日本科学社、1947年)においては、日本美術史を時代順に論じたうえで、第十章「浪漫主義と仏画——法隆寺金堂壁画の美的価値」として、西洋近代絵画における浪漫主義と写実主義の議論から、日本美術の仏画・法隆寺金堂の壁画を論じるという離れ業をしてのける。西洋美術・日本美術(東洋美術)の枠を超え、広い視野で芸術の価値とその創造について論じるのである。こうした視座を用いて議論を組み立てることを可能にしたのは、たとえば渡欧中に見た古代美術に感じた「懐かしさ」や「彼地の藝術もまた私達の中に生きることを知った感激」といった実感ではなかったか。

本稿では、宗太郎が渡欧時に記した古代美術の論考について、エリー・フォールの著書との比較検討をおこなっていないなど検討ははまだ十分とはいえず課題が残ってしまった。また、京市芸大中井資料内に含まれる宗太郎の研究ノート類についても未検討である。今後資料調査を継続しつつ宗太郎の著作の内容検討を進め、彼の日本美術研究の着想がどこにあるのか、いかに位置づけられるのかを明らかにしていきたい。

謝辞：京都市立芸術大学芸術資料館および同館学芸員松尾芳樹氏に調査のご協力をいただきました。

末尾になりますが、ここに記して謝意を表します。

本調査の一部にJSPS科研費15H03169の助成を受けています。

注

- 1) 稲賀繁美「画家の留学 青山義雄氏にうかがう——一九二〇年代フランス滞在の一齣」『美術フォーラム21』9号、2004年。
- 2) 中井宗太郎「ともに歩いた一人として」『三彩』169、1964年。田中日佐夫「中井宗太郎先生」『日本美の心象風景』吉川弘文館、1995年。田野葉月「中井宗太郎と国画創作協会」神林恒道編著『京の美学者たち』晃洋書房、2006年。
- 3) 田野葉月「大正期における中井宗太郎の思想展開——土田麦僊の実践を通して——」『Core Ethics』(立命館大学先端総合学術研究科) vol. 3、2007年。同「中井宗太郎と土田麦僊：美術教育の理論と実践をめぐって」『美術教育』291、2008年。同「京都画壇と中井宗太郎：その理念と実践」『美術教育』291、2008年。
- 4) 既出注2)3)の他、田中日佐夫「日本美術史学史序説(1)」『成城文芸』125、1989年。田中日佐夫「中井先生の『絵画論』と美術史」『日本絵画論』文彩社、1976年。赤井達郎「中井宗太郎先生と浮世絵」同前『日本絵画論』所収。加藤一雄「中井先生と国画創作協会」同前。
- 5) 山本真紗子「百貨店の着物図案創出における日本美術研究成果の影響——中井宗太郎と高島屋百選会の事例から——」『Core Ethics』(立命館大学先端総合学術研究科) vol. 8、2012年。同「百貨店の着物図案と日本美術史研究——高島屋百選会趣意書にみる本阿弥光悦論」『美術

美学者中井宗太郎の渡欧体験（1922～23）（山本）

フォーラム 21』29号、2014年。

- 6) 西槇偉「東アジアから見た西洋近代美術：民国期の西洋美術受容と日本」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』27、2002年（同『中国文人画家の近代——豊子愷の西洋美術受容と日本』思文閣出版、2005年所収）。西槇偉「豊子愷の西洋美術受容とその日本留学」『美術フォーラム 21』9号、2004年。
- 7) 松尾芳樹「雑誌『制作』と国画創作協会 付『制作』総目録及索引」『京都市立芸術大学芸術資料館年報告』第1号、1991年。
- 8) 中井あい『ドラクロアの日記（第一巻）』石原求龍堂出版部、1929年。中井愛^(ママ)訳『ドラクロアの日記』石原求龍堂、1942年。岩崎余帆子「日本におけるドラクロワ紹介——中井あい訳『ドラクロアの日記』を中心として」『美術フォーラム 21』vol. 23、2011年。『中井あい その人と生涯 歩みつづけて』中井あい追憶出版刊行会、1980年。
- 9) 長野県出身。南画家児玉果亭に師事、菊池芳文の門にはいり、のち娘婿となって菊池姓を嗣ぐ。第二回文展に《名士古聖を弔す》を出品して二等賞を得、大正7（1918）年には審査員となる。帝国美術院会員・帝室技芸員などをつとめた。昭和7（1932）年より京都市立絵画専門学校教授・同美術工芸学校校長となる。作品に《供灯》《立女》《南波照間》など。
- 10) 京都府出身。京都市立美術工芸学校・京都市立絵画専門学校を卒業。第一回文展に《夕月》を出品。大正7（1918）年母校京都市立絵画専門学校助教授に着任。第1回国画創作協会展に《降魔》を出品し国画賞を受ける。同会解散後は古画の模写・研究に努め、晩年は法隆寺金堂壁画の模写に従事した。著書に『画論』北大路書房、1949年。
- 11) 竹内栖鳳、土田麦僊にまなぶ。大正7（1918）年文展で《山村に春近し》が初入選。大正8（1919）年から国画創作協会展、昭和4（1929）年から帝展に出品。昭和14（1939）年山南会を結成。作品に《伊豆夏景》など。田中日佐夫「吹田草牧—その人と作品と文章」『美学美術史論集』第八号第二部（成城大学大学院文学研究科）、1991年。田中日佐夫「吹田草牧の作品と文章—上—「真鶴の2月」の場合（アートクリティック）」『三彩』497、1989年。田中日佐夫「吹田草牧の作品と文章—下—「ボジリポの漁家」の場合（アートクリティック）」『三彩』498、1989年。『吹田草牧——日本画と洋画のはざままで——』笠岡市立竹喬美術館、2005年。
- 12) 装演師。京都市中京区。竹内栖鳳や土田麦僊・小野竹喬らの作品表装を多く手掛ける。著書に『古木餘春』伏原春芳堂、1927年。「周辺人物事項解説」原田平作他『国画創作協会の全貌』光村推古書院、1996年参照。
- 13) 上蘭四郎「日本画家の西洋憧憬と渡欧の精華——国展の画家たちを中心として——」『日本画家が描いた西洋風景——滞欧作を中心として——展』図録、笠岡市立竹喬美術館、2013年。
- 14) 土田の滞欧中の書簡は田中日佐夫「土田麦僊のヨーロッパからの書簡」・「土田麦僊滞欧書簡——妻・千代宛封書——」『美学美術史論集』第六輯、1987年、同「土田麦僊のヨーロッパからの書簡（続篇）」・「土田麦僊滞欧書簡——妻・千代宛絵葉書——」『美学美術史論集』第七輯、1988年に紹介・翻刻されている。本稿中の土田麦僊の書簡の引用は上記資料に拠る。またこれらを用いた麦僊の渡欧時に着目した先行研究には、金井徳子「土田麦僊の滞欧書簡」『比較文化』3、1957年、同「土田麦僊のイタリア通信」『比較文化』4、1958年、同「土田麦僊の滞欧生活とそれ以後——ベトイユ書簡を中心として——附麦僊の印譜・年譜」『比較文化』5、1958年、同「土田麦僊の滞欧生活とそれ以後」（上）『三彩』134、1961年、同「土田麦僊の滞欧生活とそれ以後」（下）『三彩』135、1961年、「土田麦僊の書簡 欧州への旅（1） 第一回加茂丸より一九二一年十月四日～十月二十二日」『三彩』307、1973年、上田文「土田麦僊のヨーロッパ

- 渡欧による芸術観の変化について』『美学論究』（関西学院大学）14, 1999年, 柏木加代子『かきつばた——土田麦僊の愛と芸術』大阪大学出版会, 2003年, 豊田郁「土田麦僊の欧州遊学をめぐって」『文化交渉 東アジア文化研究科院生論集』（関西大学）第5号, 2015年がある。
- 15) 田中日佐夫「吹田草牧のヨーロッパからの書簡」『美学美術史論集』第八号第二部（成城大学大学院文学研究科）, 1991年。「渡欧日記」『視る』（京都国立近代美術館ニュース）303号, 1992年9月号～478号, 2015年5-6月号。本稿中の吹田の書簡・日記の引用は上記資料に拠る。
- 16) 「契月のみた欧州」『生誕130年記念 菊池契月展』図録, 三重県立美術館ほか, 2009年～2010年。
- 17) 日本画家。帝国美術院会員, 帝室技芸員, シュバリエドレジョン・ドヌール勲章授与。大正10（1921）年, 長男節哉を伴いヨーロッパ旅行に出発。フランス, ドイツ, オランダ, イタリアなどを巡って12月に帰国。
- 18) 東京帝国大学文科大学哲学科に入学してケーベルに師事, 書生として8年間ケーベル宅に寄寓している（なお, 同窓である中井はケーベルの講義は一年ほどしか聞けなかったと語っている）。3年間の独仏留学に派遣される。明治43（1910）年10月帰国し直後に京都帝国大学の美学美術史講座教授に着任。我が国のアカデミックな美学研究の基礎を築いた一人である。大正11（1922）年には2度目の留学中であつた。中井と深田とは, 大学の同窓というだけでなく, 明治44年結成の「文學美術研究會」のメンバーなど, 京都での美学研究仲間として交流があつた。神林恒道「初代教授深田康算の着任」『京の美学者たち』晃洋書房, 2006年。
- 19) 「中井梅園」『周辺人物事項解説』原田平作他『国画創作協会の全貌』光村推古書院, 1996年。
- 20) 中井夫妻には子供がなく, 生前の夫妻と面識があつた方2名にたずねてみたが, 中井辰三についてご存知の方はいらっしゃらなかつた。【資料番号11】9月12日・パリ・宗太郎書簡内で, 宗太郎があるトラブルについて辰三に対し, 「可ナリ迷惑ナ事ダカラソ オ云フ事ハ神崎君ガ適当ニ考ヘテ呉レルダロ オト思ウカラ, 兄カラ怒ツテ来タ ソシテ神崎君ニ頼ンデ適当ナ処置ヲ考ヘテモラツテ呉レト依頼シテ来マシタカラト言ツテ相談シテ適当ナ処置ヲ取ツテ呉レ」と指示を出している。このほか, 宗太郎から辰三に対する文面が親しい年少者に対するものであることなどを踏まえ, 辰三を宗太郎の弟と推定する。ご存知の方がいらっしゃればご教示いただきたい。
- 21) 「辰三ハ大ニ身体ヲ注意シテ健康ニ注意シテ呉レ 私ノ方ハ安心デス」【資料番号6】6月13日・パリ・宗太郎書簡など。
- 22) 「辰三ノ歌澤名取問題一寸阿呆ラシイ気ガスル, 早く大天狗小天狗ガ澤山出来タト見エル。日本ハソレダカラ駄目ダ。併シ名取りニスルト云ヘバ成ツテ置クノハ面白イ。松葉巴ノ羽織デモ送ラウカ。」【資料番号28】正月3日・パリ・宗太郎書簡など。
- 23) この時期にヨーロッパ滞在・留学した日本人について, 各人についての個別研究は多数存在する。それらとは別に, この時期の日本人滞欧者の実態やネットワーク, その時代的特徴について取り扱った先行研究には, 下記のようなものがある。
- 和田博文他『言語都市・パリ 1862-1945』, 藤原書店, 2002年。同『パリ・日本人の心象地図 1867-1945』藤原書店, 2004年。同『言語都市・ベルリン 1861-1945』, 藤原書店, 2006年。同『言語都市・ロンドン 1861-1945』, 藤原書店, 2009年。末永航『イタリア, 旅する心 大正教養世代がみた都市と美術』青弓社, 2005年。戸村知子「日本人画家滞欧アルバム 1922」『日本大学大学院総合社会情報研究科・電子マガジン』9, 2002年・同10, 2002年, 同13, 2003年, 同14, 2003年, 同15, 2004年, 同18, 2004年, 同22, 2005年。(<<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~e-magazine/index.htm>> (2016年8月20日閲覧)。真鍋正宏『近代旅行記の中のイタリア

西洋文化移入のもう一つのかたち』学術出版会，2011年。

24) 【資料番号6】7月10日，パリ，宗太郎書簡等に，深田訪問の言及がある。

25) 「パリに飯ると例によつてあとから来た中井さんの一行はレストランも我々の連中と違ふし又一切外の連中ともつき合はないので多くは自炊をしたり，陰気な事だ，けれども我々連中は呑気にみな一つのレストランに集まる」大正11（1922）年7月27日？〈7月28日〉ベトイユ，土田書簡。

「中井さんの一行は去る廿二日の夜八時の汽車で立つた，停車場には僅かに自分と吹田君と浜田君と同宿の小島氏が送つて居たばかりだ，如何にこの連中が四人も居ても唯れも送るものもない程孤独であつたが知れるだろう，実に不思議(ママ)な一団であつた，」大正12（1923）年2月23日〈2月25日〉パリ，土田書簡。

26) 「帰つて飯ヲタイテ，大根オロシヲシテ 牛肉ト玉子トヲタイテ茶ツケヲシテ食ベマシタ 日本ト同ジデス ス様ナモノガ食ヘルトハ思ヒモヨラナカツタ，日本ノ(ママ)シヨユーガアルノガ何ヨリデス。タバ茶ヲオシンデ使フノデスガ今ハ未ダ大丈夫デスガナクナルト困リマス 誰レカ知ツタ人デ巴理(ママ)ヘ来ル人ガアツテ迷惑デナカツタラ茶ヲ持ツテ来テ● 呉レルト実ニ結構デス。」【資料番号6】7月10日，パリ，宗太郎書簡。

「私達ハ大抵毎日 Hotel デ飯ヲタイテ一度ハ必ずお茶ツケヲ喰ベテキル。食物ハソレデ日本ニ居ルト殆ンド変リガナイ。今日モヒルハタイヲ入江君ガ買ツテ来テ呉レテ刺身ヲシテタバタ。タイハ実ニ安イ大キ（注：イ脱カ）モノガ廿十銭ホドデー匹買ヘル。サバモ値（注：安脱カ）ダ。併シイワシガ高イ。」【資料番号7】8月1日，パリ，宗太郎書簡。

後出・【資料番号12】9月25日，パリ，宗太郎書簡。

27) パリ到着から2週間程度で「中井さんなどはもう先日から日本食をはじめてられます。」[6月14日〈6月15日〉パリ，しづ宛草書簡]と，吹田もなかばあきれ気味？であった。

28) 【資料番号13】(9月)26日，パリ，宗太郎書簡。

29) 「菊地さんの熱心な勉強ぶりにはつくづく敬服して居ます。昼飯もたべずに，やつて居られるので，中井さんらが心配して居られます。」10月25日・吹田草書簡。

「菊地(ママ)さんたちが帰られたら，日本の新聞紙上を賑はすことでせうが，今度あの連中で，洋行が一番「きゝめ(注：原文黒傍点)」があつたのは菊地(ママ)(引用者注：さん脱カ)でせう。真面目な人ですから，すっかり書生に返って，一生懸命に勉強し，考へこまれたやうでしたが，この近比の菊地(ママ)さんの絵の見方や，云はれる事の「しっかり」して来たのにはつくづ／＼感心しました。あれだけの大家で居て，あんなに真面目な人はまるでありますまい。(中略)それによく辛抱が出来ると思ふ程，質素な生活をしてられました。買物も古いエジプトの彫刻から，現代のフランスのキュビズムに至るまで，随分沢山の美術品を買つて行かれました。」2月24日〈2月25日〉パリ・吹田草書簡。

30) 「巴里ニ生活シテキルト実ニ呑気デ(判読不能・俗カ) 世間トノ交渉ガナイト自分ノ勉強バカリ能キルノデ実ニ結構ダ。」【資料番号27】12月13日パリ・宗太郎書簡。

31) 『大毎美術』第3巻第9号，1924年の「美術界消息」に，宗太郎が夫人同伴で再度渡欧の計画をしているとの記事がある。

32) 「中井さんは毎日ルーブルに通つて居るし，又妻君は毎日伏原と一緒に仏語に通つて居るそうだ」大正11年6月22日・土田書簡。

「愛子ハ語学ヲ十分ニ完全ニスルタメニ個人ノ先生ト語学校ヘ通ツテ日ニニ軒行キマス。併シ楽デ別ニ無理ハアリマセヌ。ソレガ終レバ，秋カラ大学ヘキキニ行ク考ヘデス。」【資料番号5】

(6月) 29日, パリ, 宗太郎書簡。

「愛子ハコノ五日カラ丁度ソルボン大学ニ文化講座が出来タノデ毎日大学ヘモ通ツテマス。文学ト哲学ノ方ヘ出マス。十月デ第一期ガ終ルノデ十一月ニハ伊太利ヘ行キマス。」【資料番号 6】 7月 10日, パリ, 宗太郎書簡。

「愛子ハ佛蘭西語ニヨホドウマクナツタ。外国人デ発音ノ綺麗ナハ(注:ノ脱カ)ナイガアナタハ上手ダトヨク佛蘭西人ガホメル。」【資料番号 10】 9月 4日, パリ, 宗太郎書簡。

33) サラベルナル座での椿姫, オデオン座での喜劇飲劇 (【資料番号 12】 9月 25日, パリ, 宗太郎書簡), Odeon で「フィガロの結婚」観劇・「露西亜バカリノ音楽会」(【資料番号 13】 [9月] 26日, パリ, 宗太郎書簡), オペラ観劇 (【資料番号 28】 1月 17日, パリ, 宗太郎書簡) など。

34) 「私達ハ一日ノ中一度洋食ヲ喰ベテ二度日本食デス 併シ簡単ニ能キマス 金ハ思ツタ^(抹消後訂正)ホドカ、ラナイ。ソノ反リ二本ヲ澤山買ヒマス。毎日買ツテマス。モ一千元ホド買ヒマシタ。」【資料番号 5】 (6月) 29日, パリ, 宗太郎書簡。

「私モ殆ンド毎日日本ヲ買ツテキル。安イシヨイ本ガアル。日本デナイ稀ラシイ本ハ高^(にじみ)買ツテキル。モ一千五百円ホド買ツタソレデチツト早く帰ラナケレバ^(にじみ)ナクナツテ来タ。」【資料番号 7】 8月 1日, パリ, 宗太郎書簡。

35) 東京帝国大学・同大学院を卒業しヨーロッパ留学後, 大正 13 年東北帝大教授となる。のち日本女子大, 明大教授。西洋の中世文化史・ルネサンス史・日本の城郭研究などで知られる。著書に『城郭之研究』日本学術普及会, 1915 年。『ルネサンス文化の研究』三省堂, 1938 年など。文部省の在外研究生として約 2 年間欧州に派遣されており, その半分をイタリアで過ごした。帰国後, イタリアの代表的な美術品を都市別に取り上げた『永久の羅馬』雄山閣, 1926 年, 『伊太利みやげ 美術をたづねて』博文館, 1927 年を上梓している。

36) 「その夜は, アレキサンドラと云う宿へ東京帝大講師の大類博士を訪ねて(中井さんの奥さんがしばらく学んで居たという人) 羅馬見学に就ている―注意を受けました。この人は大分永く羅馬に居て研究して居る篤学な人です。(私たちがロンドンへ行つたとき, サウスケンシントンの美術館で出遇つたことがありました。) 深切^(ママ)にいろ―教えて下さいました。」12月 17日, ローマ, しづ宛吹田書簡。

37) 「ロンドンノ美術館ハ又英国デソレゾレ特色ガアツテ佛蘭西ニハナイモノガアリマス。ブリティシユノ美術館ニアル希臘彫刻ナゾハ希臘へ行テモ中々ニ見ラレス立派ナモノデス。何シロ最盛期ニ出来タバルテノンノ彫刻ヲ全部持ツテ帰ツテキルノデス。作ハ実ニ立派デアルヲ見テカラ希臘彫刻ト云フモノガスキニナリマシタ。研究スル考ヘデス。繪ノ方ハ駄目デス繪ハ何ト言ツテモバ里デス。」【資料番号 9】 8月 18日, パリ, 宗太郎書簡。

38) 「モ一西洋ノ美術モ古代カラ近代マデ系統的ニ見タノデ少シ新聞ニモ書テ送ツテヤロカト思ツテキル。」【資料番号 24】 (11月) 25日・26日, パリ, 宗太郎書簡。

39) 以下, 中井あい『新しき中世の美』山口書店, 1943 年の「序」「あとがき」からの引用である。

40) 既出・西槿 2002。

41) 「私達ハ朝餉ヲ終ヘテ十一時カラルーブルへ行ツタ。今日ハ希臘ノ彫刻カラ見タガ近代ヲ見ルノガ目的デアツタ。近代ノ室ヘ這入ル。ヤハリ近代ハ近代デヨイ。特ニクールバーヲ見テ大ニ感心シタ。コノ人ハ古代ニモ劣ラヌエライ人ダト沁々思ツタ。ルーブルハ実ニ結構ナ所デ各時代ノモノガアル。伊太利ノモノモアル。古代ヲ見テ来タ眼ニハ又々発見スル所ガアツタ。」【資料番号 24】 (11月) 25日・26日, パリ, 宗太郎書簡。

42) 「昨日ハ日曜デアツタノデ前ノセーヌ川蒸気ニノツテ一時間余リノサン・クルト云ウ所マデ

遠足ヲシマシタ。巴里ノ郊外デセーヌノ岸デ小丘ニナツテキル。森ノ中ヘ這入ルト鬱蒼トシテ日モ闇イ位デス。^(ママ)丁度春ノ森ノヤウデ高見デス。遙カニ巴里ガ見ヘマス。草ガ生ヘ茂ツテクローバモアリ。久シ振りド草ノ香ヲカギマシタ。水モ流レテマス。噴水ガアル実ニヨイ所デス。ムードンノ丘ツヅキデス。森ノ中ニハ小学校ノ生徒ガ音楽ニツレテ踊ヲシマシタ。森ノ中ヲヌケテ陶器デ有名ナセーブルヘ行ツテソコノ博物館ニ入り夕景ニ帰りマシタ。』

- 43) 「今日ハ British Museum ニ希臘彫刻ヤラ特別ニ中央亜細亜ノモノヲ見セテモロタ。』【資料番号 8】 8月12日, ロンドン, 宗太郎写真はがき。前掲注 38・【資料番号 9】 8月18日, パリ, 宗太郎書簡。
- 44) 「大分多ク欧州ノ美術ヲ見タノデ先ズ一般ダケハ分リ十分批評眼モ出来マシタ。今現代画壇ノ論文ヲ書イテマス。ソレガ終レバ古代ノ美術史ヲ書キマス」【資料番号 9】 8月18日, パリ, 宗太郎書簡。
- 45) ともに市川美術図書出版部刊。
- 46) 富山県出身, 竹内栖鳳門下。昭和 11 (1936) 年京都市立絵画専門学校教授に就任。大正 12 年 1 月 20 日ごろにマルセイユにつき黒田重太郎・広田百豊と一緒にイタリア旅行後パリに入る。滞欧中にはロンドンやスペインを回ったことが, 吹田の書簡からわかる。
- 47) イエナ大学で哲学の学位をとり, のちベルリン大学で先史学を学ぶ。ケルン大学講師・助教授を経てマインツ大学教授。1925 年先史美術と原始美術の研究を主とした雑誌 *Ipek* を創刊。宗太郎が引用した文献は *Die Malereider Eiszeit*, 1921, *Die Kunst der Pirmitiven*, 1923。日本語訳では角田文衛・大城功の訳による『人類文明史』(全 3 巻) みすず書房 1958～1960 年。岡元藤則『洞窟の壁画——氷河時代人の遺跡をたずねて』山本書店, 1960 年 (のち芳賀書店, 1972 年, 旺史社, 1977 年から再刊) がある。
- 48) フランスの医師・美術評論家・美術史家。1902 年より「オーロール」紙の美術批評欄を担当。引用文献であり, 彼の代表作である *Histoire de l'Art* (『美術史』) は 1909 年 (実際の刊行は 2010 年とも) に第一巻 *L'Art antique* (『古代美術』) 初版が刊行。以降, *L'Art médiéval* (『中世美術』・1911 年) *L'Art renaissance* (『ルネサンス美術』・1914 年) *L'Art moderne* (『近代美術』・1920 年) が出版。4 巻刊行完了後の 1921 年には前 3 作の改訂版が出たほか, さらに数度の改訂がおこなわれている。なお, 彼の著作の日本語訳は戦前には発刊されておらず, *Histoire de l'Art* の日本語訳は国書刊行会より 2002 年～2010 年にかけて刊行された。
- 49) 高階秀爾『『形態の精神』エリー・フォール』『美の思索家たち』新潮社, 1967 年。
- 50) 吹田は, 竹内栖鳳の今回の出品作はよくないなど, 「日本画と云ふものの前途を考へさせられるような内容であると手厳しい。展覧会現地では不評判で新聞などでもほとんど黙殺しているにもかかわらず, 毎日新聞の久米桂一郎の帰朝談に大成功とあって可笑しくなった, と書いている (7月24日〈7月25日〉パリ・しづ宛吹田書簡)。また, 土田は, 入場料を払って会場に入ると「直に久し振りに見る例の枠張りの画がづらりと並んで居た, それが実になんともいへぬいやな気分がたゞよつて居るのだ」と最初から散々なけなしようで, 「兎に角今度の展覧会はいやなものだが自分は得る処が多かつた」と締めくくっている (4月26日ベトイユ, 土田書簡)。

人 文 学 報

(表1) 京都市立芸術大学芸術資料館所蔵中井宗太郎・あい関連資料内の滞欧書簡一覧

*本資料は現在芸術資料館の資料番号が付与されていない。そのため、本表で付した番号は本稿のための仮のものであることをご了承いただきたい。本文との対照のため、日付順にならべ、年月日不明のものを最後にした。
 *便箋本文と封筒に記入された日付・消印が一致しない場合がある。複数の日付のものが同一の封筒に入れられるなど、封筒と中に入っている便箋が原状通りとは限らないため、原則便箋・はがきに記入された日を基準としている。
 *宛先・差出人の略称は次の通り。宗=宗太郎、あ=あい、母=宗太郎母、姉=絹子(梅園)、辰=辰三。差出人→宛先の順に記載している。

番号	年月日(推定含む)	滞在地	差出・宛先	種別	員数	主な内容	備考
1	(4月)27日	香港	宗・あ→辰	写真はがき	1	香港上陸	
2	(5月11日)	コロンボ	(宗)→辰	写真はがき	1	コロンボー(現:スリランカ・コロンボ)到着、明日スエズに向かう	
3	日付記入なし(6月4日?)	パリ	(あ)→辰	写真はがき	1	1日朝パリに到着	
4	6月13日	パリ	あ→母・姉・辰 宗→(母・姉・辰)	封書	3	パリ到着約10日、食事のこと、同行者の様子	
5	(6月)29日	パリ	宗→母・姉・辰 あ→母・姉・辰	封書	3	トロカデロ博物館へ行った、一生懸命勉強している、今日は日本人倶楽部に行く、3日前に日本画展覧会を見た、今後の旅行の予定、日本から送ってほしいもの	
6	7月10日	パリ	宗→母・姉・辰	封書	3	辰三の歌澤・体調の心配。パリ郊外へ出かけたこと。あいはソルボンヌの聴講・自分はループルへ日参。深田康算の訪問	
7	8月1日	パリ	宗→母・姉・辰	封書	1	7月14日国民祭日(フランス革命記念日)の様子、毎日の生活や食事について、英国旅行の予定、送ってほしいもの、夏は絵画商休みなので旅行する、帰国日程は誰にも言わずにいてほしい、通信に時間がかかって困る、貴重な美術史の本を買った	
8	大正11年 8月12日	ロンドン	宗・あ→辰	写真はがき	1	ロンドン塔やBritish Museumの希臘彫刻を見た、日本料理食す、十六日には巴里へ帰る	
9	8月18日	パリ	宗→母・姉・辰 あ→母・姉・辰	封書	4	ロンドンの感想、パリの生活、今後の旅行準備	
10	9月4日	パリ	宗→母・姉・辰 あ→辰	封書(封筒欠)	3	ドイツからパリに帰る、ドイツ旅行の感想、織田君に世話になった、本の購入	
11	9月12日	パリ	宗→(母・姉・辰)	封書	1	菊池氏と近藤氏と4人でオペラ見に行く、「何ト云フテモ美術ハ巴里ダ」、峯のこと神崎君に依頼せよ、母・辰三の体調に用心せよ、本をたくさん買った	
12	9月25日	パリ	宗→母・姉・辰	封書(封筒欠)	2	音楽会や演劇を見に行くこと、ドイツから帰り毎日勉強、イタリア旅行の計画、寺尾夫妻・田中善・野長瀬晩花の帰国、パリの居室の様子	
13	(9月)26日	パリ	宗→辰	封書(封筒欠)	2	辰三の歌澤、Odeon座の芝居や「露西亜バカリノ音楽」、Odeirxに行く	
14	(9月29日)	パリ	宗→辰	写真はがき	1	「逸三氏ノ奇難」の新聞を落手、伊太利行の準備で忙しい	
15	10月3日	ミラノ	宗→辰	写真はがき	1	伊太利第一信。スイスを経由しミラノへ到着。ミラノ大聖堂前の「メトロポール」に宿泊	
16	(10月)12日	ベニス	宗・(あ)→辰	写真はがき	1	伊太利第三信。ベニスの町の感想、ベニス派ノ絵は「今一呼吸コタヘス。」	

美学者中井宗太郎の渡欧体験（1922～23）（山本）

（表1）京都市立芸術大学芸術資料館所蔵中井宗太郎・あい関連資料内の滞欧書簡一覧（続き）

番号	年月日（推定含む）	滞在地	差出・宛先	種別	員数	主な内容	備考
17	10月14日	フィレンツェ	(宗)・あ→辰	写真はがき	1	伊太利第四信。フィレンツェ、ボボリの丘、ジョットを見てフラ・アンジェリコの壁画のある僧院訪問する	
18	10月28日	アッシジ	宗・あ→辰	写真はがき	1	伊太利第六信。フロレンスから移動	
19	10月31日	ローマ	宗→辰	写真はがき	1	伊太利第七信。ローマ、バチカン見物	
20	11月10日	ローマ	宗・(あ)→辰	写真はがき	1	伊太利第八信。ローマ。12日よりナポリ旅行の予定。その後ローマへ帰還	
21	11月14日	ナポリ	宗・(あ)→辰	写真はがき	1	伊太利第九信。ナポリ。昨日ボンベイ廃墟、今日「コノ地ノミュゼ」に行く	
22	11月18日	ローマ	宗→辰	写真はがき		伊太利第十信。ピサの斜塔、博物館。このちパリへ帰る	
23	11月19日	アビニオン	(宗)・あ→辰	写真はがき	1	アビニオン、パリへ戻る	
24	(11月)25日・26日	パリ	宗→母・姉・辰	封書	3	今日はルーブルに行った、近代の部屋・クールベに感心する、伏原が帰国	中断したものを翌日書いたもの
25	日付記入なし(11月25日・26日?)	パリ	あ→母・姉・辰	封書	2	パリの生活、家族の健康について気遣う、パリの芸術について	24番と同じ封筒に入っていた
26	12月3日	パリ	宗→母 宗→姉	封書	2	(母に)体調を気づかう、(姉に)「巴里ハ実ニ藝術ノ都」、ポエッシーなどの新作絵画展覧会見る	
27	12月13日	パリ	宗→母・姉・辰	封書	3	毎日勉強、あいはソルボンヌへ通っている、ベルネームの展覧会見に行く、帰国時の日程、巴里の印象を和歌に読む、イタリアを見て重荷をおろした気分	虫損部分あり
28	正月3日	パリ	宗→母・姉・辰 あ→母・姉・辰	封書	4	フランスの正月、日本人倶楽部で雑煮食べる	
29	1月17日	パリ	宗→母・姉・辰	封書	3	毎日ルーブル通い、オペラを見に行く、スペイン旅行の計画、パリの人々は呑気	
30	日付記入なし(1月20日ごろ?)	パリ	宗→(母・姉・辰)	封書(封筒欠)	1	帰国の準備	前後欠落か
31	1月22日	パリ	宗→母 宗→姉 宗→辰 あ→母・姉・辰	封書	9	(母に)お金の心配はいらない・体調を気づかう、(姉に)近代よりも古代に感心した、今後の日本画のありかたについて、(辰三に)歌澤のこと、土産のこと	
32	2月7日	パリ	宗→母・姉・辰 あ→母・姉・辰	封書	6	帰国向に荷物の発送、スペイン旅行出発	
33	2月18日	パリ	宗→母・姉・辰	封書	3	スペイン旅行の感想・これがパリ最後の手紙になるかも	
34	2月20日	パリ	宗→辰	はがき	1	手紙到着の連絡、スペインから帰ってきて遊んでいる	
35	(月不明)22日(帰国直前?)	パリ	宗→辰	封書(封筒欠)	1	荷物はシンガポールの長井禎商店内吾妻重太郎宛に送るのが確実(帰国航路での手紙の送り先の指示?)	前後欠落か
36	2月24日	マルセイユ	宗・あ→辰	はがき	1	マルセイユ、デュネーヴ旅館にて、いよいよ明日出航	
37	不明年月日不明	パリ	不明	写真はがき	1	「手紙のあて名は9-Hotel 13 isson 37 Quoi Jes Augustins Paris (Vie) (六区ノコト)」とのみ	手紙に同封されたメモ書か

要旨

本論文は大正期・美学者中井宗太郎（1879～1966）の渡欧体験とその後の彼の研究への影響について論じている。新出の京都市立芸術大学芸術資料館所蔵・中井宗太郎・あい関連資料に含まれる、滞欧中の宗太郎とその妻あい（1890～1978）の書簡を中心に用いて、分析をおこなった。中井夫妻が欧州にわたったのは、大正11年（1922）4月～大正12（1923）年4月のことである。彼ら二人とともに、日本画家の菊池契月、入江波光、吹田草牧、装潢師の伏原佳一郎が渡欧している。夫妻はパリを拠点に、ロンドン、ドイツ、イタリア、スペインにも足をのばし、各地の美術館や遺跡などをまわった。とりわけ、宗太郎が注目していたのは古代と近代の美術である。精神性や自然観照といった西洋美術内の東洋美術的な要素に着目する視点は、渡欧前から見られるものの、さらに意を強くしたようである。

ルーブル美術館に日参しとりくんだ古代美術の研究により、帰国後『氷河時代と埃及芸術』（1923年）と『希臘芸術』（1925年）が刊行された。そこには作品の実見による成果のほか、エリー・フォールの著書などが参照されており、滞欧中の研究の実態が垣間見られる。一方、画廊等で目にしたドイツ・フランスの新作絵画や、現地で目にした日本美術展覧会（Exposition d'Art Japonais）の出品作には期待を裏切られたようだ。その感想を元に書かれた「日本畫の行くべき道」（『大毎美術』19号、1924年）では、芸術とは「絶対精神」を基礎として「時代精神」を反映した作品を生み出すこと、その方法については近代の西洋美術の発展方法から教訓を得ることなどを論じている。帰国後の中井は日本美術史研究に注力していくが、西洋美術研究の成果は、桃山美術は日本のルネッサンスとする見解や、『絵画論』（1947年）第十章「浪漫主義と仏画——法隆寺金堂壁畫の美的価値」などに見られる、西洋美術・日本美術の枠を超えて普遍的な美術の価値やその創造を論ずる考察などに現れている。

キーワード：吹田草牧、入江波光、土田麦僊、西洋美術受容、日本美術研究

Abstract

This paper looks at how the year art aesthetician Nakai Sotaro (1879-1966) spent studying in Europe (1922-1923) later influenced his research. Letters during his European stay are used as the main source of information, while newly available materials related to him and his wife Ai and the materials in the collection of the Art Museum of Kyoto City University of Arts are also referenced for this study. Being interested in ancient and modern art, Nakai and his wife based themselves in Paris and travelled to museums and ruins in London, Germany, Italy and Spain to see the actual works of art they were studying. Meanwhile, works by contemporary French artists they saw in Paris and the Exposition d'Art Japonais (Paris, 1922) helped them to reflect on the future of art in Japan, leading them to suggest referencing the spirit and development method of modern western art for creating Nihonga paintings. Upon returning to Japan, he focused on the common characteristics between western art and his study of Japanese art, resulting in his research discussing the value and creation of universal art that transcends the framework of both western and Japanese art.

Key words : Suita Soboku, Irie Hako, Tsuchida Bakusen, Reception of European Art, Japanese Art Studies